井田吉六作「色絵菊花流水図手焙」について

本年は尾形光琳の没後300年として、琳派関連の展覧会が各地で開催されている。光琳の弟である尾形乾山(1663~1743)も、陶磁器や絵画の制作によって琳派の作家として注目されてきた一人である。

乾山は、37歳の時に京都の鳴滝泉谷に窯を開き、鳴滝が京都の北西(乾)の方角にあることから「乾山」と号し、作品の銘としても用いた。その後、50歳の時に京都市内の二条丁字屋町に移住して作陶を続け、69歳の享保16年(1731)の頃に江戸に下向して入谷に移り住んだ。元文2年(1737)9月から初冬には、陶磁器制作の指導のために下野国佐野にいき、その後江戸に戻って81歳で死去したとされる。京都以外での乾山の作陶については、栃木県佐野市の旧家から発見されたとされる乾山銘作品の真贋論争事件(昭和37年)の経緯もあって、未だ充分に研究が進展していない状況にある。

一方アメリカのボストン美術館のモースコレクションには、井田吉六(1792~1861)作による乾山写しの「水指」が所蔵されていて、この作品の銘文が下野佐野期の乾山作品を検討するのに良好な資料であることが古くから知られていた。井田吉六は、江戸に出てから骨董商に転じてほぼ独学で製陶も学び、文化8年(1825)浅草蔵前で、天保5年(1834)には浅草寺境内にやきものの店を開いて商売をしたとされる。のちに江戸の5代乾山とされる西村窈庵(みやくあん)のもとで乾山の陶法を学んで「乾斎」とも号し、11代将軍徳川家斉の面前で作陶をする席焼を命じられるほどの陶工となって、甥の三浦乾也(1821~89)の作陶指導もした人物である。

図1

図2

図3

その作品の銘文は満岡忠成氏が『陶器講座 第4巻 東日本の陶器』雄山閣(1938)の「関東諸窯」で紹介しているが、篠崎源三氏は『佐野乾山』窯藝美術陶磁文化研究所(1945)の中で、モースコレクションの目録に掲載された銘文と三浦乾也による粉本集「石井乾也陶漆摹範」(梶山家蔵)にある「乾山手あぶり」の写真2枚を掲出して考察をしている(図1)。三浦乾也による粉本集「石井乾也陶漆摹範」については、中野敬二郎氏が「三浦乾也と泰野窯と梶山良助」『焼きもの趣味』昭和16年10月号で取り上げた内容を引いて紹介し、銘文中の「松邨壷青英亭」については、慶長期以前から続いた佐野の松村家の本家が本陣をつとめる地方屈指の素封家であることから、「壷青英亭」は当時の本家の茶室の庵号ではないかと類推している。篠崎氏は、吉六の銘文の内容をふまえて吉六と乾也が伯父と甥、さらに師弟の関係でもあることから、尾形乾山が下野国佐野の松村家を訪れて作った本歌の手焙(モースは吉六作品をWater-jarとするが、篠崎氏は手焙の誤解と考えている。)をどこかで見て、乾也は折り本の写生帳にその姿をスケッチし、井田吉六は作品の写しを焼造したのであろうと推定している。

さて、本稿で紹介する井田吉六作「色絵菊花流水図手焙」は、篠崎氏が挿図で取り上げた作例と近似し、ボストン美術館のモースコレクションの作品とも同手のもので、大阪市立美術館がバルタザール・ウンゲルン-シュテルンベルク氏から昭和28年に寄贈を受けた作品である(図2)。ウンゲルン-シュテルンベルク氏は、神戸外国語大学の講師であったドイツ系エストニア人のロシア貴族であったが、その経歴等については、土井久美子「バルタザール・ウンゲルン-シュテルンベルク氏について」『大阪市立美術館紀要』第15号(2015)に詳しく紹介されている。ウンゲルン-シュテルンベルク氏の寄贈による陶磁器類は、ボストン美術館のモースコレクションと同様に、江戸後期から明治期にかけて焼造された日本陶磁が中心で、来日した昭和3年(1928)から死去した昭和27年(1952)の間に日本各地で収集された作品群である。

本器は高18.5cm、口径13.6cm、底径14.0cm、碁笥底でほぼ円筒形を呈する作品で、円盤状の薄い布団が付属し、手焙とすべきものと考える。内面上端部から外側面中程までは黒地に錆絵で菊花の縁取りをして、花蕊には黄色、葉には緑の色釉をさしており、下方の白地の部分には染付でいわゆる光琳波が施文される。乾也による乾山作手焙のスケッチとは、菊花文の表現が簡略化されている点が注目される。底部には錆絵による銘があって、長方郭内に「於野之下州佐埜/庄松邨壷青英/亭而雍州/乾山陶隠深省圜」、その左下方に「吉六模之」と記しており、モースコレクションの目録に記載された書体・字配りなどの点でもほぼ一致する(図3)。釉薬の剥落が若干あるものの、幕末期の乾山写の作例中では、絵付けなどの技術の点からも上手の作品であり、吉六の作品としても良好な作例と考えられる。本歌の作品が発見されてはいない中では限界はあるものの、本器の銘文は下野佐野における尾形乾山の作陶を類推できうる可能性があり、江戸下向以降の乾山陶のあり方を探る傍証資料としても、貴重な作例と考える。

(守屋雅史)